

滋賀県文化審議会次世代育成部会第7回会議 議事録

- 1 日 時 平成 25 年 8 月 6 日 (火) 15:00～16:30
- 2 場 所 滋賀県庁本館 3 C 会議室
- 3 出席者 委員：辻部会長、木下委員、杉江委員、瀬古委員、中島委員、宮本委員
滋賀県立琵琶湖博物館、公益財団法人滋賀県文化振興事業団
事務局：総合政策部次長、文化振興課長、ほか
- 4 議事録 以下のとおり
-

■ 次長挨拶

■ 議 題

(1) 議題 1 文化活動を支える人材（アートマネージャー等）の育成・支援に関する施策の実施状況について

○事務局

(議題 1 について説明)

○琵琶湖博物館

(はしかけ制度について説明)

○部会長

・はしかけの人たちは実際に博物館へ行って、来館者をリードしたりするのか。

○琵琶湖博物館

- ・グループによって来館者との接し方は違う。外で調査をしているグループは博物館にあまり来ない。逆に博物館の中で活動しているグループは来館者との触れ合いはあるが、地下にこもって活動しているものは来館者とほとんど接することはない。ただ、イベントをするときには出て行って自分たちの活動を紹介することはある。
- ・基本は自分たちで楽しむということなんだが、できたらもう少し博物館の活動を外に広めてほしい、思いをつなげてほしいと思っている。

○委員

・はしかけグループは今 15 ある。将来的にはもっと数を増やすのか。

○琵琶湖博物館

- ・十何年かかってこの状態で、十数個で安定している。本当は自主的にグループを作ってそこに一般の方々が入って広がっていくのを望んでいるが、なかなかそういう風に広がっていかない。とりあえず学芸員が呼びかけて入ってもらっている。
- ・博物館の制度なので、窓口としての学芸員を必ず置くようにしている。グループリーダーは学芸員ではなく、それぞれ一般の方。

○委員

・小学校には総合学習というのがあって、なかなか担任だけでは知識が浅いので、アドバイザーなどをグループに依頼すれば来ていただけるのか。

○琵琶湖博物館

- ・相談して依頼するのは今でもやっているし構わない。
- ・宣伝が足りないといわれているが、広告費が限られていてなかなか宣伝できないところがある。

○委員

- ・これを見ると小学校の総合学習でやっていることをより深められる。もう一步深めたところを専門家の方に来てもらい授業をしていただくとか、いろんなヒントがあるのでぜひアナウンスを。

○委員

- ・これだけのバリエーションがあるのは関西ではここだけで、これだけの活動をしているのは非常に素晴らしいなど。ただ、予算とか人の問題とか、情報出せば出すほど大変になってくる。文化ボランティアというよりは、より地域の人と触れ合う場として活動をしているという考え方が特徴的。その裾野をどう滋賀県として広げていくのか。私としてはそういうところにこそ予算を付けていただきたい。

○琵琶湖博物館

- ・使える博物館というのを目指していて、いろんな方向で利用者が使えるように。その一つがはしかけ制度だと思っている。

○委員

- ・基本的には人がいなければこれだけの事はできない。もう一つは、自然系だからやり易いということもあり、仲間から口コミで広がっていくのでは。

○委員

- ・利用者が主体というのはとてもユニークだし、有効だと思う。15の会の方達、すなわちヘビーユーザーが企画できるというところをしっかりと作って、そこから来館者の方達に広めていくという事は実におもしろいなと思っている。
- ・参加されている方は、休みの時に活動される方が多いということだったが、だいたい年齢層はどのくらいなのか。

○琵琶湖博物館

- ・年齢層はやはり少し高齢の方が多いが、小学生くらいから入っている。家族で入っていて、家族なんだけどみんな違うグループに入っていたりといろんなタイプがある。

○委員

- ・元気な方々が「色々こういう事があって良いですよ」と言って動いて頂けると、理想としてはよい。

○委員

- ・スタッフセミナーと学校関係者向けの連携授業のセミナーはターゲットがしっかりしていて、そこでの研修は非常にわかりやすいと思うのだが、古典芸能について心配するのは、研修はしたけどどのようにフォローしてあげるのか。やっぱり支援の上でそこまで考えてあげないと。
- ・舞台芸術とか古典芸能に関心を持つ学生はけっこう多い。しかし舞台芸術とかは、修学制度がまだ確立されていないので、ターゲット層を広げるとよい。

○部会長

- ・施設の職員の方の教育みたいな形になっているが、結果というか効果はどうか。

○（公財）滋賀県文化振興事業団

- ・古典芸能アートマネジメント人材育成講座は、アートマネジメント系と古典芸能に特化した形で、コースの設定をしている。
- ・制作プロデュースコースという所に文化施設の職員の方、地域で色々な活動をしている方、舞踊や合唱といった事をしている方、中には学生もいる。学生は、将来こういう仕事につきたいとか、教員になりたい方が多い。文化施設の職員の方は直接自分の仕事に繋がる。地域で活動されている方については、実際自分が試行錯誤してやっている事以外にも、知っておかなければならないというので来られる。
- ・全部終わってからそれぞれの職場や地域に戻って、学んだ事を生かしてもらえれば。

○事務局

- ・公文協のセミナーはずっと続いている。どちらかと言えば、これは各市町とか市町の文化ホールとかの新任の人が来てという所が多い。

○部会長

- ・大学生のボランティアは、どういう形で参加をしているのか。

○委員

- ・一方的に授業というのではなくて個人参加も含めて、いろんなアプローチで参加してもらっている。研修については学校の先生を主体的にやっていて、先生が博物館の事を知らないとか、受け入れ体制が十分でないとか、その辺の意識改革を10年間やってきている。

○委員

- ・はしかけのグループ活動の話で、自主的な参加の為、交通費や食費がでないとのことだが、活動費とかはどうしているのか。

○琵琶湖博物館

- ・博物館としてはゼロ。博物館にあるものは使ってもらっている。それは博物館の設備として整えておいて、人が変わっても使ってもらえるものなので。

○委員

- ・海外の美術館なんかは、ボランティア活動に対してものすごく力を入れている。日本でも人材育成も市民と協同ということはよく言っているが、その辺の落差は未だにもものすごく感じる。それをすぐに改正はできないけど、少しずつ何か滋賀県でできることはやっていければと思っている。

○部会長

- ・例えば企業とかの援助をもらう時に「こういう次世代を育てる為に援助をください」とか。そうするとまた違う入り方ができるかもしれない。教育関係とかに声かけすれば可能性がでてくるのではないかな。

○琵琶湖博物館

- ・自分たちのやりたい事を実現していくという意味では、自分たちでお金を出して来るのは特に違和感はないかと思う。

○委員

- ・活動するにはそれだけの資金力や時間がある人に限定されてしまう。そこは特に資金力のない学生はちょっとかわいそうだと思う。

○委員

- ・ヘビーユーザーの方の時間もあるしお金もあるというのは、非常に貴重な人だと思うので、しっかり大事にしておかれたほうがいい。大事な所に据えて、二重構造とかそういうものを意図的に作っていく。来にくい人はまた別の形で足を運んでもらえるように知恵を絞っていく。

○委員

- ・熱心な人だけじゃなく、軽い博物館ファンを増やすなど、両方いる。そうしないと博物館の入館者が全然増えない。

○委員

- ・両方の政策をバランス良くやっていくように色々研究しているが、ヘビーの方は結構政策はあるが、ライトの方の政策はほとんど無いと言ってもいい。やはりファンを増やす為にもきちんとそこをやるべき。

(2) 議題2 「学校と連携した文化芸術体験事業の実施状況について」

○事務局

(議題2について説明)

○部会長

- ・「文化芸術の力を教育に」事業はまだこれからなのか。

○委員

- ・私関わってます。やはり学校に行けない子は、全体的に新しい人が入っていくと、隠れてしまう。だけど、音楽をするのは新鮮で、即興演奏をしたら喜んでくれた。その空気感によって心が開いて、子ども達も話しかけてきてくれて「また来てね」と言う感じで終わった。これがまた学校に行くきっかけになったらいい。

○委員

- ・関係性を考えるというところから、別室登校や適応指導教室で授業を受けている子どもから始めるということですね。

○委員

- ・長期的にみていけば、もっとみんながコミュニケーションし合って一緒に作っていくような環境を、学校が芸術の力を使って作り上げていくことによって、土壌としていじめとかが起こりにくくなる。
- ・別室の子ども達だけでなく、その子ども達が他と交わるようなところまで考えたプログラムというのが、やっぱり大事な所かなと思う。

○委員

- ・お互いわかり合うというか、気持ちを通じ合う、気持ちが変わってくれるだけでもいい。理想は上手にいかないかもしれないけど。

○部会長

- ・うちの学生でもグループワークがなかなかしにくい。コミュニケーションして作り

上げていくという訓練を受けてないので、グループワークの時、本当に時間がかかる。でも一つずつそれをやっていく過程で少しずつ変化していくのは見られる。

○事務局

- ・この事業は1学期でまず学校を選んで入らせて頂いて、どういうやり方をしようかと色々話し合いながら、2学期からは、もう少し本格的に始動し始める。
一年で終わる事業ではないので、委員の方々がおっしゃって頂いている、次の到達点に向けて、どういった事をやっていこうかと考えながら進めていきたい。

○委員

- ・「学校にアートがやってきた」事業について、今後の方向性というのとは何か。成果というのが気になる。初めての事業なので、その辺丁寧に効果測定のようなものがあればいいのかなど。

○委員

- ・地域で若手芸術家がおられたら、その方の支援をしていけたらいいということで、3校予定している。本校では、廃材を利用して風景画を描いておられる方のアートギャラリーを中心に、多目的室を利用して2週間ぐらい実施の予定。
・ワークショップでは木に絵を描いてみようというのを「やまのこ」と関わって実施しようかと思っている。

○委員

- ・小学校の空き室はかなりあるのか。

○委員

- ・かなりはない。段々と児童が減少しているので空き教室が出来つつある。増えているのは都市部だけの話で学校によって違う。

○委員

- ・古典芸能アートマネジメント人材育成講座だが、なぜ滋賀県の古典芸能という事にポイントを絞ってこういう講座をやるのかという目的が解らない。古典芸能をやめてしまうというのを、何とか地域に入ってマネジメント出来るような人を育成するというのが、滋賀県では必要なのではないか。その辺の事を明確にいうのだったら、このマネジメントやプロデューサーの育成というのに非常に意味があると思う。

○部会長

- ・滋賀県独自のマネジメントのあり方は大事。その地域にあって何をこれから大切にしていくのか。その為のマネージャーを育成していくのが大事だと思うし、それが明確なのかということ。

○(公財)滋賀県文化振興事業団

- ・受講した方が、それぞれの地域や職場に戻られた時にそれを思い返して還元してもらえるかを、どういう風に支えていくのか考えながら、講座の内容やカリキュラムを決めていかないとと思っている。

○部会長

- ・もの凄く大事なことということで「うみのこ」「やまのこ」「たんぼのこ」の資料を付けてもらった。基本的にはそこをベースに色々積み重なっている。今そういう感受性とか自然とふれ合うこと、滋賀県ではできるけど、県外の都会の子は何もで

きない。その辺はこれからもっと生かしていきたいところ。

○委員

- ・これはそれぞれ担当の課は別々。どこに繋がるかということを経営課がもう少し知っておいても。そこがベースになって、文化が乗っかってくる。その構造とこの構造をしっかりと構築しておく必要があるのではないか。せつかくこれが土台としてあるのだから。

○事務局

- ・「ホールの子」もびわ湖ホールで聴かせたい、せつかく滋賀県に住んでいるのだから、小学校1年から卒業するまでに体験させたいということで始まった。実現までには時間がかかったが、子どもの教育には強い思いがある。そのため、一般の方を支援する方にはちょっとお金的に回りにくいという面はある。

○部会長

- ・次世代を育成するベースというのはそこだと思ひ、その上にまた積み重ねていくということで。それは逆に滋賀県の特徴になりうると思ひ。

○委員

- ・今のは非常に重要なことで、このベースになる事業と、ここで議論している次世代育成とは繋がっているという話を県庁内でしてもらえないか。これがあって、この文化振興課の文化的なことが次世代から積み上がっていくのだということ。

(以上)